

## 『機会の恋』 - 燦銀光輝

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

私はアンドロイドだ。そのようにして生まれてきたし、そのようにして生きてきた。

ぼんやりとした意識の中で、ふとそんなことが頭をよぎった。

「ジョー、おはよう」

記憶の底から少女の声が聞こえる。そういえば、私の名前はジョーだったか。私はそっと声の主を頭に思い浮べる。よく私に懐いていた、可愛らしい少女だった。少女の声が一層鮮明に蘇る。

「ねえジョー、ジョーは人間じゃないの？」

少女はいつも同じ質問をしてきた。対する私の答えもいつも同じ。

「裕子(ゆうこ)、いつも言っているだろう？ 私はアンドロイドだ」

そう、少女は確か名を裕子といった。裕子は納得がいかないように続ける。

「ジョーはあんどろどろなの？ どうしてジョーは人間じゃないの？」

「……アンドロイド、だ。私は買われてこの家に来たのだ。どうしても何も、裕子たち人間とは、全く別物なのだ」

いつもと同じ会話。するといつも少女はひどく悲しそうな顔をするのだ。

何故だ。何故そんなに悲しそうな顔をする。私は私であり私以外の何者でもない。私はアンドロイドなのだ。それが、そんなに不満なのか。やめろ。そんな顔をするな。お前にそんな顔をされると、気分が悪くなる——

「おい、いい加減起きろ！ いつまで寝てんだコノヤロー！」

突然の大音量に私は微睡(まどろみ)から引き剥がされた。同時に、自分が完全に覚醒したことを知る。すぐ目の前に声の主と思われる女がいた。愛らしい顔立ちにふっくらした胸、健康的な肢体と、一般的には魅力的な女なのだろう。が、その瞳は野獣のような危険な輝きを放っていた。

「おお、起きた起きた」

女は妙に嬉しそうににっこり笑い、

「逢いたかったよマイハニー」

止める間もなく抱きついてきた。一瞬、自分がフリーズしたかと思ったが思考が一瞬停止しただけで、身体機能は生きていたようだった。なれなれしく頼ずりまでされ、困り果てて辺りを見回すと、同じく困り果てた表情をした老人と目が合った。この老人には見覚えがある。確か、私が一番初めに目覚めた時、つまり私が一番初めに買われた時に色々と手続きをしていた——そして現在私がいる——この店の主人だ。と、いうことは。

「私はこの女に買われた、ということか」

老人はほっとしたように頷いたが、耳元から物凄い勢いで抗議の声が上がった。

「何だとお前、この女とか！ よそよそしすぎるだろ！ 私とお前の仲だろうに！」

耳元で喚かれるのでうるさくてかなわない。

「そんなことを言われても」

私はお前など知らない。そう言おうとして硬直した。持ち主確認のために取った手の、その指紋はかつての記憶とぴったり一致していた。まさか、と思ひ女の瞳を覗き込み、網膜を確認する。女の頬が少し赤くなったが気にしている場合ではない。私はこの女を知っている。

「……裕子？」

頼むから否定してほしい、という儂い願いも虚しく、

「やっと思い出したかー！ いい子に育ってお姉ちゃん嬉しいぞ！」

さらにきつく抱き締められて頭をわしわしと撫で回された。

「やめてくれ。せめて……、せめて何か着させてくれないか」

アンドロイドは商品でいる間は通常裸で保管される。衣服は誰かに買われた時に、

買い手が好きなものを選ぶことなる。

……裸で陳列されているのだし別に恥ずかしい訳ではないのだが、それにしたって。

私は大きなため息をついた。人とは変わるものだ。それは知っていたが、まさかあの可愛らしくおしとやかな少女が、機械とはいえ裸の男に平気で抱きついてくるような人間になるとは。私の感傷をよそに、逞(たくま)しく育った裕子は、  
「おーそうだな。パニースーツがいい？ ナース服？ それとも男は黙って禪(ふんどし)一丁？」

と恐ろしい選択を私に迫った。

「丁重にお断りさせて頂く。もっと一般的なものを」

「えーつまんねー。人生もっと楽しく行こうぜー」

裕子がぷうと頬を膨らませる。その表情にはあの頃の可愛らしさが健在で、私は何とも複雑な思いに駆られた。しかし禪で外を出歩く訳にはいかないので意地でもまともな服を選んでもらう。裕子はまだ不満を言っていたがおとなしくシャツとスラックスを選んでくれた。

……襟元と袖口のフリルはこの際我慢だ。

「しかしまあ」

私が裕子の不躡な視線に晒されながら何とか着衣を終えると、静かに控えていた店主がしみじみと口を開いた。

「こうしてまたジョーが買われていくのを見送る日が来るとは思いも致しませんでした」

裕子は私に頬ずりしながら応える。

「ホントだよーもう会えないかと思った！」

でも、会えてよかった。そう言って真っ正面から私を見つめて微笑む裕子に、私は本来この対面はあり得ないものだということを思い出した。

この世界では、アンドロイドは人間の生活に欠かせない存在だ。ホームセキュリティや水道やガスなどのライフライン、料理や洗濯といった家事まであらゆるものがアンドロイドによって行われている。

アンドロイドにはランクがある。ライフラインを管理するものは、万人が持っているわけではないので安価だがランクも低く、アンドロイドというよりは所謂ロボットだ。人型のものはあまり見かけない。次は家事や警備などをこなすもの。これはそこそこ裕福な家庭がよく所持している。大抵のものは人型だが、人間そっくり、というレベルではない。それより上のものとなると、もう限られた金持ちしか所持できない。見た目も人間そのもので、凄まじい知識や相当の戦闘力を持つものなど、一般的には必要ないと思われる能力を持つものが多い。

それでは。それではさらに上、最上級のアンドロイドは一体どんな能力があって、どんなに素晴らしいことが出来るのかということ、実は特に何も出来なかつたりする。何故かということ、最上級のアンドロイドはもっとも人間に近い存在として作られたからだ。だから性格や個性、それに伴う欠点などは丁寧に作り込まれているが、特殊能力は何もない。

子どもが欲しいと願う親は、こいつはものすごい頭のいい人間にしようとか、とんでもない身体能力がある人間にしようとか、何かの目的のために子どもの誕生を願っているのだろうか？ 何らかの願いを込めることはあるだろうが、目的をもって子を授かるとする親はあまりいないだろう。私達に特別な能力がないのは、そういうことだ。

私達。そう、私達というからには、私もその最上級アンドロイドの一体なのである。私が作られた目的はただひとつ、私らしく生きるためだ。特に能力もない、何でも言う事を聞くわけでもない、そんな役立たずを、しかも莫大な金をはたいて買う輩(やから)がいるのかということ、いるのだ、これが。なかなかどうして金持ちは物好きが多いらしい。私を買ったのは、やはりそういった物好きな金持ちだった。しかし

(そういう人間は存外に多いのだが) 彼らは私をお手伝いロボットか何かだと勘違いしていたらしく、私に家事をやらせようとした。私は当然断った。私は下僕として生まれてきたわけじゃない。私の義務は私らしく生きることだけであり、雑用をやる必要など全くないのだから。しかし買われた立場であるし、主人に逆らうような行動がプログラミングされている訳ではない。私は不平不満を垂れながらもそれなりに働いた。

その家には小学校に入る前の小さな娘がいた。それが裕子だった。その頃の裕子はおしとやかで可愛らしく、人見知りのする弱気な子どもだった。そのせいか最初は私を見て警戒心を強めるばかりで少しも懐かなかった。しかし小娘に警戒されようがされまいが私にとってはどうでもいいことだったので放っておいた。それが却ってよかったのか、いつの間にか裕子は私に懐くようになった。最初は鬱陶しいと感じていたが、どうしてどうして、そんな裕子にあつという間にほだされてしまった。だが、それがいけなかった。私は冷静で皮肉っぽくものぐさ、そういうアンドロイドとして作り出された。私は私らしく、冷静で皮肉っぽくものぐさに生きなければならなかったのだ。

裕子の家は金持ちだった。最上級のアンドロイドが買えるのだからそれは並大抵でない金持ちだ。加えて裕子は気の弱い子どもだった。つまり、異端を排除したがる年齢の子ども達の、格好の餌食だったのだ。私は、裕子が甘えてきた時はそのまま甘やかしておいたが、例え見知らぬ痣(あざ)を作っても詮索はしなかった。その程度にはものぐさだった。しかし、目の前で裕子が無慈悲に傷つけられるのは、耐えられなかった。

……………。

大抵の場合、戦闘用でないアンドロイドには闘う機能はない。必要もないのにわざわざ危険な機能をつける意味はないからだ。しかし人間を目指しているため、全くの無力という訳にはいかない。子ども型のアンドロイドには子どもなりの、女性型のアンドロイドには女性なりの力がある。そして、私は男性型である。制作者の趣味により平均よりひ弱に設定してあるが(小柄な美少年型、らしい)、一応男性型である。喧嘩の仕方などプログラムされていない。人を殴る方法など教えられていない。それでも、何の力もない子どもを傷つけるには充分だった。

……………。

実を言うとその時のことははっきりと覚えていない。ただ誰かが「貴様なんか廃棄処分にしてやる！」

と叫んでいたことは覚えている。当然だ。アンドロイドが人間を傷つけるなどあってはならない。私の人生(アンドロイド生?)はここで終わったのだと、妙に納得したものだ。

で、ここで素朴な疑問。

「何故私は……ここにいる？」

裕子がにやりといやらしく笑う。

「いやー、人間持つべきものは金と権力だよね」

「本当にいやらしい奴だなお前は！」

つい大きな声を出していた。いけない、いけない。何だかこの裕子といるとキャラが崩壊していく気がする。

「だが、本当に金と権力だけでどうにかなったのか？」

人間で言えば犯罪者を保釈するような。あ、それは金と権力でどうにでもなるか。「ああ、まあ、それはそれなりに色々あったけどね。でもそれはお前が気にすることじゃないよ」

裕子が無駄に頼もしい笑みを浮かべる。どうやら金と権力以外に何があったのかを語る気はないようだった。ちらりと店主に目配せしてみるが、気付かないふりをしてる。こちらも答える気はないようだ。まあいい。知らなくていいことは知らなくてもいい。私は元来ものぐさなアンドロイドなのだ。

暫(しばらく)く裕子と店主がアンドロイド所有に関する契約書や必要な物資をやりとりしているのをぼんやりと眺めていた。

「よし、じゃあ帰るか」

裕子がそう言って私の手を引いた。

どこか自嘲するような笑みで裕子が言う。

「昔の暮らしと比べたらショボいけど、ま、勘弁な」

そしてすぐにあのいやらしい笑みに戻って付け加えた。

「私達の愛の巣なんだからな」

連れてこられたアパートを見て、私は暫し呆然とした。

「これ？」

間違いのはずはないのに思わず確認してしまった。裕子はおかしそうに笑う。

「そ。築五十年木造二階建て、トイレは共同風呂はなし、六畳一間で日当たり良好、家賃は驚きの月二万五千円！」

どうだ、と言わんばかりの裕子の顔に、かける言葉が見つからなかった。昔と比べたらショボいとかいうレベルではない。大金持ちだった昔と比べれば大概の暮らしはショボく感じるだろう。だがこれは絶対的にショボいのではないか。これよりもっとギリギリの生活を強いられている人もいるのは知っているが、これはこれでギリギリなのではないか。

「わざと、なのか？」

ひねくれ者に育った裕子のことだ。もしかしたらわざとこんな貧しげな暮らしをしているのかも知れない。そう思って聞いてみたが首を横に振られてしまった。

「悪いけど、私の収入だとこの程度がちょうどよくなってね」

どうやら本当にこの生活レベルらしい。しかもどうやら自分の稼ぎだけで生活しているようだ。親から惜しみなく金を注ぎ込まれていた幼少時代を知る私からすれば、かなり意外なことだった。私の疑念に気が付いたように裕子が言った。

「親とはどうも意見が合わなくなってね、うん。学校出てからはずっと一人なわけですよ」

「そうなのか……」

そこで私はふと気付く。

「こんな生活でどうやって私を買ったんだ？ 最上級のアンドロイドはとても高価なはずだが」

裕子にはやりと不敵な笑いを浮かべる。

「ふっふっふ、いい質問だね。だがいつまでも自分が高級品だと思うなよ！ お前は暴力事件起こしてしてスクラップにされるところだったんだぞ。そんなチョイ悪アンドロイド、誰が正規価格で売るもんか」

成程そういうことか。言い方は少し気に食わないが、事実だから仕方がない。

「ちなみに、私はいくらだったんだ？」

「契約金とか付属品とかみんな合わせて七万ちょっとかな。ちなみに、本体だけなら特別価格で二千円でした」

「にっ……」

二千円……！ さすがに少しプライドが傷ついた。絶対今着ている服の方が高価だ。裕子はその私を見てくつつと笑う。

「ま、そんなにへこみなさんな。お前が高級品のままだったら一緒に暮らせなかったんだから。ほれ、入るぞ」

がっちり肩を抱かれ強引に歩かされる。セキュリティも何もない、オンボロの外階段を昇る。別に豪勢な生活に慣れてしまったわけじゃない。だが貧困生活というのは初めてだ。私は少々の不安を感じながら裕子の部屋へと向かった。

「うっ」

部屋に入った瞬間思わず声を上げてしまった。汚い。布団は敷きっぱなしパジャマは脱ぎっぱなし、果物の皮が乗った皿はそのまま菓子パンの包装紙もそのまま挙句の

果てはいかがわしい本まで放置してある。これは酷い。

「あー、そういえば布団敷きっぱなしだったわ」

いやあいつもはもうちょっときれいなんだよいやまたお前に会えると思ったら昨日は何か寝れなくてさ、今朝寝坊して慌てて出てったからだよホントだってば等と言いつつ訳のようなものを呟きながら裕子が片付けを始める。しかし片付けというよりただ物を隅に寄せているだけのよう。布団は畳んで端に寄せ、着替えは丸めてほいと積み上げ、食器は流しに放り込み、ゴミは直接ゴミ袋行き。いかがわしい本はそっと押入れに……。

「いや今更隠されても」

「じゃあ堂々と置いとこう」

「遠慮はいらん、存分に隠しておいてくれ」

裕子は何が楽しいのかげらげらと笑う。品のない笑い方だ。そしてあらかた片付けを終えたところで裕子が玄関へ向かう。

「じゃあそろそろ行くか」

「行くかって……どこへ？」

「どこへって、お買い物に決まってるだろ。ショッピングだよショッピング。お前も行くんだぞ」

「なぜ私まで行かねばならんのだ」

「お前のものを買に行くからだよ。お前自分が今日からここで生活するって分かってんのか？ いや、そりゃ私と同じグラスからジュースを飲みたいとか、私と下着を共有したいとか歯ブラシを共有したいとか言うならそれでいいんだけど」

「いや、私が悪かった。頼むから買い物に連れて行ってくれ」

裕子がまたげらげらと笑う。本当に素面(しらふ)かどうか疑われる。

「あっはっは、そんなにおねだりしなくても何でも買ってやるよ。あっは、高いものは無理だけど、ね」

裕子がおいでおいでと私を手招きする。動物じゃないのだからと文句を言いたかったが、どうせ言ったところからかわれるのがオチだろう。私は黙って裕子についていくことにした。

数時間後。私たちは両手に荷物を抱えて帰宅した。

「いやー、買った買った」

「全くだ。少し調子に乗って買いすぎたんじゃないのか？」

最初は衣料品や生活用品なんかを見てまわっていたのだが、次第にそういえばアレが切れかけてたとかティッシュが安いから買ってこうとかせっかくだから今日は御馳走にしようとかで、あっという間に荷物と出費が高(かさ)んでしまった。はしゃぎ気味の裕子につられてつい色々買ってしまっただけが懐は大丈夫だったのだろうか。少し心配になって裕子を見たが、裕子は相変わらず呑気な笑みを浮かべている。

「ははは、見事に悪い買い物の見本を演じちまったな。まあ今は安定して収入があるからとりあえず大丈夫だよ。貯金できないと仕事が入ってこなくなった時怖いんだけどねえ」

買い物中に聞いたのだが、裕子は物書きの仕事をしているらしい。何を書いているとは言わなかったが、とりあえず生活に困らない収入はあるようだ。ただ仕事が途切れると困るので少しランクの低いアパートで暮らしているのだとか。

裕子は相変わらず物を隅に寄せ上げるだけの下手くそな片付けをしている。というか、それは片付けとは言わん。大体そんなに衣服を積み上げたら崩れるだろう……ってほら言わんこっちゃない。新しく買ったものと元々あったものがごっちゃになって更に散らかる。裕子は愚かにもそれを更に積み上げようとする。当然、衣服の山は再び崩れ落ちる。ああ、何だかもう見ていられない。

「片付けは私がやっておくから、お前は夕食の支度をしなさい」

「え？ でも私は別に家事をさせるためにお前を娶(めと)ったわけじゃ」

「いいからそこをどけ。あと娶るとか言うな」

まさか私が自分から家事をするはめになろうとは。下僕として生まれたわけじゃな

い、というアイデンティティが揺らぐ。だがいつまで経っても終わる気配のない積み木ごっこを眺めているよりはマシだ。私は軽くため息をつきながらごちゃごちゃになった衣服を丁寧に畳んでいった。

「あなたあ、ご飯できたわよお！」

裕子のふざけた呼びかけで私は我に返った。部屋の片づけだけでは飽き足らず、そのまま部屋の掃除をし、更には押入れの整理にまで手を伸ばしてしまい、つい作業に没頭していた。

「ものぐさって言う割にはよく働くじゃないか」

「お前が私以上にものぐさなだけだろうが！」

何となくプライドが傷ついたのを感じながら食卓を見る。かぼちゃの煮つけやホッケの開きなど、豪華ながらも地味な面子が並んでいる。裕子は意外と渋好みようだ。

「いただきまーす」

うむ、旨い。アンドロイドも最上級となれば、人間と同じ食物でエネルギーを得られるのだ。実際は充電式の電池パックの方が効率がいいのだが、高級品なので多分買っていないのだろう。久しぶりの食事に舌鼓を打っていると裕子がじっとりこちらを見つめているのに気が付いた。

「な、何か用か」

「いや、こうして見るとホント人間っぽいなと思って」

私は思わず顔を顰(しか)める。意図せず不快感が胸を燻ぶった。(……私はアンドロイドなのだ。それが、そんなに不満なのか……)

かつて味わったことのある苦々しい気分が蘇ったようだった。

裕子は私の不快感を感じ取ったらしく、慌てて謝ってきた。

「あ、いやスマン、悪気はなかったんだ……けど、そうだな、もういっちょ謝っとくよ。悪かった。お前がアンドロイドなのはちゃんと分かってるから」

予想外にきちんと謝罪されて私は逆に戸惑う。なんだか自分がひどく子どもじみた反応をした気になった。

「いや、別に怒ったわけじゃない」

「でもやっぱちゃんと謝っとくよ、だって……」

裕子は珍しく少し言い淀む。

「悪いけど、お前には人間として振る舞って欲しいんだ」

一瞬私は何を言われたのか分からなかった。だが理解した瞬間に口を衝いて出た言葉にははっきりと敵意が表れていた。

「何故だ？」

裕子が一瞬つらそうな顔を見せる。だがすぐにいつもの不敵な笑みを浮かべた。

「いやね、ウチはとてもしゃないけど最上級のアンドロイドが買えるような経済状況じゃないわけじゃん？ もしお前がアンドロイドだってことがバレたら、変な勘ぐりもされるわけですよ。痛くもない腹を探られるのはヤでしょ？ いや、痛くもないかどうか微妙か」

宥(なだ)めるように裕子が私の頭を撫でる。さっきまでの不快感はどこへやら、何だかむず痒い感じが胸中を渦巻いた。

「わ、分かったから手を離せ。食事ができない」

裕子は少し残念そうに手を離す。まあどうせ布団はひとつだからいっかという恐ろしい独り言を聞いたような気がしたが、気にせず食事を続けることにした。そういえば布団は買わなかったよな……。

食事が終わり、裕子がかちゃがかちゃと片付けをするのをハラハラしながら見守り、風呂代わりの銭湯へ行き、疲れをさっぱりと落として無事一日を終えた。

「うっふふふ、これからがお楽しみタイムだねええ？」

いや、全然終わってなかった。私はホントにひとつしか敷かれていない布団を見てため息をついた。

「あの……お前が何を期待しているのか知らんが、私はさっさと寝るぞ？」

「ふふふふふ、それは本気で言ってるのかな？ この状況で？ この私から？ 本気で逃れられると？」

「いやいやいや、逃れるとかそういう問題じゃなくってさ、私はもう寝ると言っているんだ」

「寝るとかそういう問題じゃなくってさ、寝かさないとっているのだよこの私が！」

「ね、寝かさないとってどういう意味だ？」

「寝かさないとの意味なんぞひとつしか知りませんが？」

「えっと、その、何だ」

「はい何ですか？ 言いたいことがあるなら今のうちに言っときなさい」

私は裕子の思わぬハイテンションに気圧されながら言おうかどうか迷っていたことを言うことにした。本当はあまり言いたくなかったが、仕方がない。

「だからその……通常、アンドロイドには性欲はないのだ」

「みゆ？」

「だから……そんなに舞い上がられても困る」

「みゆう……」

裕子が分かりやすくしよげる。ああやっぱり私にそういうことを期待していたのか。腹立たしいような悪い事をしたような。実際のところは自発的に欲情することがないだけであって、機能的に無理なわけではないのだがそんなことを言ったらどうなることか。だが裕子はめげなかった。

「でもさっき撫で撫でてあげた時はちょっと気持ちよさそうだったじゃないか。触覚がないわけじゃないんだろ？」

「え？」

「だから撫で撫でしまくってやるのだ！ くらえ！」

「ちょっ……うわ！」

止める間もなく飛びかかれて倒れこむ。図らずもそこは布団の上だった。ポロアパートの床が悲鳴を上げる。裕子にマウントポジションを取られ全身をわしゃわしゃと撫で回される。

「はっはっは、気持ちいいかこの野郎！」

「ひゃ、く、くすぐったい！ やめ、や、やめてえええええ」

そんな馬鹿なやりとりが静かに行われるはずもなく、怒鳴り込んできた下の階の住人によって、私は窒息寸前のところをかりうじて救われるのだった。

「いやー、怒られた怒られた」

「当然だ。悪ふざけが過ぎるぞ」

「うふふ、そうみたいだね。今日はもう大人しく寝ようか」

裕子が大人しく床に就いたので私もそっと布団に入る。途端に後ろから抱き竦(すく)められた。

「お前……」

「おやすみなさい、ジョー」

「……おやすみ、」

裕子、と続けようとしたが何となく言えず、結局そのまま目を閉じた。

裕子の仕事は物書きなので、基本的に外には出ない。性格が性格なので時々外に遊びに行ったりはするようだが、金が余っているわけでもないのにそんなに外出はしない。裕子に対してはすっかり遊び人なイメージがついてしまっていたので、これは少し意外だった。この間行った買い物ではしゃいでいたのも何となく分かる。

いや、そんなことはこの際問題ではない。さしあたっての問題は、暇。とにかく暇なのだ。初日以来部屋の掃除と食事の後片付けは私の仕事になっていたが、それだけで時間が潰せる程一日は短くない。最初のうちは裕子が持っている本を読んで過ごしていたが、それもあらかた読み終えると、本格的にやるものがなくなってきた。

「まだこの辺の本は読んでないんじゃないか？ ほれ」

裕子がこともあろうかいかかわしい小説を提供してきた。

「遠慮しておく。前にも言ったが、私に性欲はない」

「単なる読み物としても面白いぜ？ ほらここの表現とか。『崇は美代子の熟れた蜜——』」

「読み聞かせるなあ！」

「自信作なのに……」

「自画自賛かよ！ じゃなくてお前が書いたのかよ！ というか何書いてるんだ！」

「いやだから仕事だよ。言ったでしょ？ 物書きだって」

「物書きって……」

私はがくりと脱力した。くくく、と裕子が楽しそうに笑う。こいつめ、やっぱり私をからかって楽しんでやがる。ふいとそっぽを向くと、裕子の手がにゅうと伸びてきて私の頭を撫でる。

「怒るな怒るな。ところでさ、近くに図書館があるんだけど、そこ行ってみない？」

「ご機嫌をとっても無駄だ」

「行かないの？」

「……行く」

連れてこられた市立図書館はなかなか立派な場所で、暇を持て余していた私にとっては天国のようなところだった。読んでも読んでも本は尽きない。記憶力は人並み以上、もといほかのアンドロイドよりも少し色を付けて作られた私にはもってこいの場所だった。何故こんな場所をもっと早く教えてくれなかったのかと思ったほどだ。

だが裕子がなかなかこの場所を教えなかった理由はすぐに分かった。世間体が悪いのだ。

普通の人間であれば働くか学校に行っているはずの時間に、することなどなさそうに図書館で本を読み耽る。なるほど、いい噂は流れないかもしれない。裕子の物書きという独特の職業に対する偏見も相まって、私は裕子のヒモということでご近所の見解は一致していた。

「まあ似たようなもんかもな、ヒモ」

「……そうか？」

言い訳をさせてもらうなら、アンドロイドは働くことができない。正確には働いて賃金を得ることができない。そう法律で決まっている。アンドロイドを買えるような家庭は、普通金に困っていないのだから今のところその決まりにけちがついたことはない。だから、私が働いていなくても致し方ないことなのだ。

だがヒモ扱いされるのが愉快なはずもない。私は次第にあまり図書館に足を運ばなくなっていた。

「別に私はヒモ男を飼ってると思われても構わないんだぞ？」

「私が構うのだよ。……それは、暗に私に出て行けと言っているのか？」

「ええー、そんなんじゃないよ、すねるなって」

始終顔を突き合わせていると会話もあまり実りのないものになる。もしも私がアンドロイドだということが皆に知れわたっていたら、こんなことにはならなかったかもしれない。いや、実際はそううまくはいかないだろうが、どうしてもそこが引っかかる。

(私がアンドロイドなのが、そんなに不満か……)

私はかつて感じていた苛立ちを無理やり打ち消そうとする。裕子は私がアンドロイドであることに不満を持っているわけじゃない。私が人間の振りをしなければならぬのは、たんに周囲との兼ね合いのため。私は、私として存在を許されていないわけではない。

(いや、違う)

私がアンドロイドであることに不満を抱いているのは裕子じゃない。他ならぬ私自身だ。私は近頃、自分が人間であればという空想に時折身を委ねている時がある。私が人間であれば、普段は働いて、裕子と対等に生活できるのに。

こんな自己否定は本来ありえないものだった。私が作られた唯一の目的——私は私らしく生きる——それが否定される。しかも自分自身の手によって。アンドロイドであることに自信を持ち、誇りすら抱いてきた私にとって、その空想はあまりにも冷た

く、重いものだった。

夕食時になっても沈んだ気分は直らず、重い空気で食卓を囲んだ。その空気は裕子にも伝わっているだろう。

「ね、今日はいつもと違うルートでお風呂行かないか？」

「……それで構わない」

重い空気を打破せよとばかりに裕子が明るい声で提案する。変わらない毎日。いつもと少し違うことをしてみるのはいいかもかもしれない。

いつもとは違う、人気のない道を二人で歩く。たいして見るものもない普通の道だが、それでも少し新鮮な感じはする。だからだろうか、裕子がいつもとは違う、少し落ち着いた口調で話す。

「お前はさ、私に買われてよかったと思ってる？」

「そりゃあ、買われなければ作られた意味もないしな。その点ではよかったと思ってるが」

「じゃあさ、何か不満はある？」

「不満」

「うん。最近家にこもってばっかだから、ストレス溜まってんじゃない？」

私は押し黙った。ささやかな空想が私を苦しめているなど、裕子に言って何が変わるというのだ？

裕子が口を開きかけたその時、場違いな台詞が割って入った。

「よう、そこのお二人さん？ お話中に悪いんだけどちょっといいかな？」

「なあに、怖がることはないさ。俺達や金に困ってるだけでね」

「お金だけ置いて帰ってもらおうかと思ったけど、へへ、お姉ちゃん、逃がすにはもったいない美人だね」

妙にベタな台詞を恥ずかしげもなく吐きながら地元のチンピラが現れた。相手は三人で、しかも何を持っているか分からない。私は考えるよりも先に裕子の前に立ちただかっていた。

「あん？ お兄ちゃんやる気か？」

「やめとけよ。お前みたいなひよろっちいの、一撃でぶっ殺しちまうぜ」

「黙れ。裕子に手を出すな」

とりえずベタな台詞を返しておいたが、喧嘩の方法などまるで分からない。どうしよう。緊張で体が強張る。後ろから宥めるように肩を掴まれた。ちらりと後ろを見ると裕子が険しい顔をしていた。止めておけと言いたいのだろう。だが既に私の台詞にすっかり逆上したチンピラどもが襲いかかってきていた。私は裕子の手を振りほどく。裕子が何か言ったが聞いている暇はない。

一步踏み出す。勝てる見込みなどない。そんなことは分かっている。分かっているなら、何故踏み出した？

さらに一步。にやついたチンピラ野郎が拳を振り上げるのが見えた。私に向けられた、あからさまな敵意を感じた途端に恐怖が全身を支配した。恐怖に震えた体がひとつの確信を私に告げた。私に、裕子は守れない。

さらにもう一步。いや違う。これは私の歩みではない。相手が私との距離を詰めただけ。私の体は動いてはくれない。

(ごめん、裕子)

私は完全に動きを止めた自分の体を恨めしく見つめる。

(私が、人間だったら……)

チンピラの拳はもう目の前。しかも相手は一人じゃない。私の人生(アンドロイド生?)はここで終わるかもしれない。そう自覚したのは二度目だが、今回はそれが悔しくて堪らなかった。

恐怖で思わず目を閉じた、その時。

「だ、か、ら！ ヤメロっつってんだろおが聞こえねえのかこの糞アンドロイドがああ！ 私の声も聞こえないような役立たずなカス耳なんか捨てちまえよゴルアアアアア！」

とんでもない罵声が聞こえた。私は驚いて裕子を見る。チンピラも驚いて動きを止めたようだった。激昂した裕子は更に罵声を上げ続ける。

「大体テメーは買われた身分の癖に生意気なんだよ！ 何様のつもりだアアン？ テメーはアンドロイドだろうがよ、テメーは冷静で皮肉っぽくってものぐさなアンドロイドなんだろうがよ！ テメーでそう言っというて何だよそのザマは！ 粹がって人間の真似ごとなんぞしてんじゃねえぞ！」

聞くに堪えない罵詈雑言のオンパレードだ。しかもこれがかかなり迫力ある声で吐き捨てられるものだから、堪らない。チンピラも、上玉だと思っていた女の変貌ぶりに声が出ないらしい。ずんずんとこちらに近づきながら、裕子の罵声は更に続く。

「拳句の果てに、喧嘩沙汰ア？ ふざけんなよテメー、自分がそもそも何でウチからいなくなったんか覚えてんのか？ 何で私があんなボロアパートで独り暮らししとるんか、何にも考えんかったんか？ 冗談じゃねえ、テメーができもしねえ喧嘩に手エ出したからだろうが！ テメーが私の前から消えたからだろうが！ それなのに、テメーはそれをまた繰り返す気か！ ふざっけんなア！」

裕子は恐ろしい顔で私を恫喝(どうかつ)してから、思いっきり後ろに突き飛ばす。私は二、三步後退さってから尻もちをついた。

「ざけんじゃねえ、私が今まで何のためにここまでやってきたと思ってんだ、ええ？ またお前と一緒にの日常を送るためだろうが！ それをまた……失くしてたまるかよ」

裕子がキッとチンピラを睨む。チンピラが怯えたように一步後退した。裕子がふっと息を漏らした。私に背を向けているため表情は見えないが、多分、いつものにやついた笑みが浮かんでいるのだろう。その証拠に、次の台詞には若干笑いが混じっていた。

「だから、ジョーはアンドロイドらしく、私に守られてればいいんだよ」

言うが早い、裕子は果敢にもチンピラに向かって猛ダッシュしていた。

「え、お、やんのかコラゲフウ」

不意を突かれもろに股間に蹴りを入れられたチンピラがあっけなく倒れる。

「テメー女だと思っガハア」

まだ口上の最中にもかかわらず、裕子は容赦なく股間を蹴り上げる。

「え……あの……ヒギヤア」

ラストは仲間二人がやられておろおろしているチンピラの股間に蹴りを……ってまたかよ。

しかし金的の効果は抜群で、立ち上がる気力のあるチンピラはいなかった。

「あはははは、見たか！ アイムアチャンピオン！」

「エイ！」と私にピースサインをしてみせる裕子に駆け寄る。

「裕子……」

「金的はねえ、真下から膝で蹴りあげるのが一番いいんだけど、やや後方から狙っても効果的なんだよ。タマ裏に神経が集中してるからね。瞬間的に感じる痛みが一番大きいんだよ」

「いや、そんなことはどうでもいい……。というか何故そんなことを知っている」

「はっはっは、まあ落ち着けよ」

それはこちらの台詞だと言いかけて止めた。今言うべきことはそんなことじゃない。

「裕子、ありがとう」

裕子がいつもの五割増しくらいでにやける。どうやら照れているらしい。つられて私も頬が緩みそうになるのを何とかこらえる。

「あのな、私、実を言うと少しだけ悩んでたんだ。私が人間だったら、お前ともっと普通に暮らせたのかもしれない、って」

照れを隠しきれなくなった裕子がついに顔を背けた。その行動が気に入らなくて私は裕子の頬を両手で挟み込み無理やりこちらを向かせる。何だか余計恥ずかしさが増したのは気のせいだろうか。だが今更後には引けない。

「だがもう迷ったりしない。お前は、私がアンドロイドでもいいのだろうか？」

裕子が相変わらずにやついた表情で言う。

「うん。私は、アンドロイドのジョーが好きだ」

今度は私が顔を背ける番だった。だが当然のように裕子に阻止され、無理やり視線を合わされる。裕子の顔にやや嗜虐的な笑みが浮かんでいた。

「で？ アンドロイドなジョー君の答えはどうなのかな？」

「答えて何だよ……ああもう、分かったよ」

私は大きく深呼吸した。じっとりと見つめられているのでやりにくくて仕方がない。

「好き……だ、裕子」

「あははははははははは！ やったあ！」

頭のねじが一斉にはじけ飛んだとしか思えないような笑い声を上げて裕子が私に抱きつく。私は散々迷った挙句、恐る恐る裕子の背に手を回した。裕子がすりすり頬ずりをしてくる。血が通うはずのない体が妙に熱くなった気がした。

「とりあえず離れろ」

一向に離れる気配のない裕子を無理やり引き剥がす。

「うー、やだー！ もっといちゃいちゃするー！」

「駄目だ！ いつこいつらが目を覚ますか分からないからな」

「端役の癖に私たちの邪魔をすとは生意気な！」

「いやいや踏んでやるなよ顔を！ 抵抗できない相手に対してお前は鬼か！ いや、ともかく、まずは風呂屋に行こう」

そしてきれいになってから、二人で帰ろう。私たちの部屋へ。そう言うと裕子は今までで一番甘い笑顔で頷いた。

私はアンドロイドだ。そのようにして生まれてきたし、そのようにして生きてきた。そしてこれからも、そのようにして生きていく。それを望んでくれる人がいる限り、私は私で居続けられる。これが、機械の、私なりの恋なのである。

[戻る](#)